の如くである、即ち東の派なる梵語、イラン語、スラブ語などに現はれて居るSの音とは似ないで、西の派なる希臘語、拉典語、ゴシック語等に見ゆるKの音と一致するものであることが明らかであらう、かくて前世紀以來歐洲の言語學者が苦心を重ねて作り上げた印歐語の分類が、夢にも思はなかつた支那領トルキスタンの砂の中から這ひ出した資料によつて、引ツくり返されてしまはなければならぬ事になつたのは、何やら一種の皮肉の様にも思はれる。

但だ斷つて置くことは、ロイマン氏の第一言語ミューラー氏のトカラ語と稱したものゝ中のA種を、レヴイ氏が何故に焉耆語と呼ぶに至つたかについては寡聞なる自分は何等知る所ないのである、たゞ前にも記した同氏の龜茲語の研究の中に此のA種の言語は龜茲と雙生の國なる焉耆國の言語即ちカラシヤールの言語であらねばならぬと述べてあるのを知るに止るのである、もとより確かな根據のある命名であらうとは思ふが、元來此の言語は初めから種々に命名せられたものでロイマン氏の如きも早く一九〇〇年には露西亞の學士院の報告に之をカシユガルの言語即ち疏勒語と呼び、後に之を更めて第一言語と稱して確かな名稱の出るのを待ち、一九〇七年にミューラー氏がトカラ語と名付けたのであつたが（藝文第二年第四號拙稿「漢譯の佛典に就て」の四七—四八頁參照）、その後も此の名稱に定まつた譯ではなく、翌一九〇八年にも露西亞のステール・ホルスタイン氏 Staël-Holstein 氏はトカラ語なる名はロイマン氏の所謂第二言語に付すべきもので、その第一言語はインドスキテン語と稱すべきであることを、同年の露西亞學士院の報告に於て論じ、一九一一年には諾威クリスチヤニヤのエミール・スミス(Emil Smith)氏は再び之を疏勒語と稱してロイマン教授の舊稱に還し、更に一九一三年に前述の如くレヴイ教授が龜茲語焉耆語